



(昭和36年生)



年男を迎えるにあたって

南区・谷山支部
(鹿児島赤十字病院) 永井 慎昌

したが、敵は子供とも共闘しているようなので二の矢三の矢が飛んでくるかもしれません。まだまだ油断は出来ません。

そんな経緯で年を重ねるという事象に関心が高まっていたところ、たまたま家族と外食した蕎麦屋さんで、「子供叱るな来た道じや、老人笑うな行く道じや」との書(?)が壁に掛けられているのを見かけました。うーん、子供の方に少し違和感があります。確かに来た道ですが、我々は散々叱られることでそれなりに成長出来たのではないかと思っています。ですので、やはり叱るところはちゃんと叱って、適切な成長へ導く必要があるのではないかなどと感じます。一方、老人の方は、これはもうわざわざ言われなくても笑うなんて滅相もありません。そもそも、自分も老眼はひどいですし、髪の毛もだいぶ薄くなっています。記憶力はかなり低下しており、もしかしたらとっくに老人の仲間入りしているかもしれません。更には、私の母も「丑」年生まれなので年女ですが、私と弟の区別がはっきりとはつかない程度の認知機能になってきました。それでも私に会うとニコニコして「慎ちゃんけ?」と嬉しそうに話しかけてきます。「長(なご)会わんが。たまには帰つて来んといかんど(月1回程度は顔を出すようにしています)」「見したんごとなつたなあ。(もうこの年ですので成長することはあります)。」と言っては肩を擦ったり、時にはハグしてきます。最近では徘徊してしまうみたいで、目が離せなくなっていました。おっと、急に思い出しましたが「徘徊」という言葉は状態を適切に表しているとはとても言えない表現だと思います。ご本人は、決して、無為に彷徨っている訳ではありません。そう

鹿児島市医師会より「新春隨筆特集号」に年男としての感想や希望などの投稿をするようにとの連絡の文書をいただきました。日々の仕事に追われすっかり忘れていたのですが、改めて自分が年男を迎えることを実感いたしました。更には、今回は還暦という大きな節目であることも察知することとなりました。ただし、12年前にも同様の通知をいただいているはずなのですが、どのように対応したのか記憶が定かでありません。今回は編集委員長の先生のお名前が、研修医時代に大変お世話になった先生であったため、何だか指示をいただいたような気持ちとなり、パソコンに向かった次第です。

まずは、「来年は還暦みたいだ。」と妻に報告しました。待ってましたとばかりに即座に「赤いちゃんちゃんこを着てもらいます。」との返事です。その後、延々と還暦の説明から始まり、何故赤いちゃんちゃんこを着ないといけないかまでを聞くはめになりました。ただ、宴会芸でもないのに赤いちゃんちゃんこを着せられるのは、ほぼいじめに近いと感じましたし、そもそも1回しか着用しないであろう赤いちゃんちゃんこは、金銭的にも多大な無駄であることは間違ひありません。何とか妻を説得し、私からすると奇抜とも思えるファッショニは一応回避出来ることとなりま

いえば、以前何かの資料で「徘徊」という表現を避け、「ひとり歩き」と言い換えているという内容の記事を目にしました。「ひとり歩き」ですか？うーん、今ひとつ状態の本質を捉えきれていないような気がします。唐突ですが、私なら、硬い表現でしかも長いですが「目的内在歩行」と名付けたいです。本人にとっては厳然と目的を持って歩いているのだということを、人々に知って貰いたいからです。ただ、その目的を、ご本人自身も忘れてしまっているだけなのです。このネーミング、いかがでしょうか？脱線してしまいましたが、そのように認知機能が落ち、「目的内在歩行」までしてしまう母ですが、私は決して彼女のことを笑うことはありません。それどころか、感謝の気持ちで、目を閉じ深々とお辞儀をさせていただいています。

ところで、今年度の「新春隨筆特集号」では、新型コロナの話題は避けて通れないのではないでしょうか？新型コロナは我々人類に、一体何をもたらしたのでしょうか？生活は一変しましたし、マイナスの影響は数え挙げたらきりがありません。悔しいので、私は何かプラスになったことを考えてみましたがなかなか思い浮かびません。あえて一例挙げると、先日離島関係の会議がリモートで開催されました時のことです。東京都の八丈島から参加された方が、名物のクサヤを紹介していました。臭いや傷への効能など興味深い話でした。リモートでこのように離れた場所から一同に会して会議が出来ることは1年前には想像出来なかったことですので、新型コロナは遠隔での人々の結びつきを強めてくれたと言えるかもしれません。感染対策で人と人の物理的な距離を保つことが厳しく求められていますが、だからこそ心と心の距離はより密にして絆を深めたいものだということは、多くの方々も指摘していることだと思います。

地域包括ケアシステムの構築が進められており、論点の一つに「認知症になっても住み

やすい街づくり」があると思います。認知症になっても住みやすい街は、認知症になっていない人にとっても住みやすい街であることは、必然的なことです。個人的にはそれを達成するための手法は、案外簡単なことではないかと思っています。それは、誰もが常に他者への優しい気持ちを持って行動すれば、誰もが他者からの優しさに包まれて暮らすことが出来ることになるからです。優しいという字は「人」を「憂」と書きます。中学生の時に漢文の先生が、漢字を作った人々の思慮深さを説明されたことを、懐かしく思い出します。誰もが周りの他者に優しくすることで、自助・共助が充実し、新型コロナ対応でも災害対策でも良い効果が出てくるのではないかでしょうか。私は上荒田町に住んでいますので、鹿児島中央駅界隈が散歩コースです。いかにも旅行者という風情の方が何か探しているような様子を見かけると、つい「何かお困りですか？」と声を掛けます（新型コロナの影響で最近は少し控えめにしていますが）。元々、今の姶良市出身の私は、鹿児島市の地理にそれほど詳しくないので、3回に1回くらいはせっかくいただいたご質問的回答に窮してしまうのですが、それでも役に立てた時は「今日は良いことをした。良い日だ。自分にも何か良い事があるかもしれない。」と内心ほくそ笑んで散歩を続けるのです。当然、「目的内在歩行」（徘徊）している方にも声を掛けることになりますので、行方不明事故などを防止する効果も期待できます。実は、警察に情報提供させていただいたこともあります。

なんだか取り留めの無いことを長々と書いてしまいました。年男を迎えるにあたって、誰もが他者に優しくしてあげる社会が実現するよう、まずは自分自身が他者に優しく接することを心がけて日々を過ごして行きたいと思います。